— 2 —

「他の人間の5分の3」

棚上げされた約束

19世紀から20世紀初めにかけて、アフリカ系米国人と彼らを支持する白人たちは、まず奴隷制の廃止を目指し、奴隷制廃止後はさらに「自由人」の法的な平等を確保するために、さまざまな戦略を用いた。人種的平等への前進は遅々としたものであったが、その大きな原因は、奴隷制と黒人に対する抑圧が、国家の統一を支える地域間の政治的妥協の一部となっていたからであった。1861年から1865年まで続いた南北戦争によって米国の奴隷制は終わりを告げたが、戦争が終わると、人種平等に対する南部の白人の抵抗を打ち負かそうとする北部の政治的意志は徐々に弱まっていった。南部全体で「ジム・クロウ」制度と呼ばれる法的な人種隔離制度が強引に導入され、黒人の政治的な前進を妨げた。それでも、アフリカ系米国人の指導者たちは知的・制度的な資本の構築を続け、これが20世紀半ばから後半にかけての公民権運動を成功させる糧となった。

バージニア州マウントバーノンのジョージ・ワシントンの農園におけるワシントンと黒人農場労働者たち（1757年）

自由の地？

米国独立の第1日目から、米国民は奴隷制によって分断されていた。南部は新たな主要作物である綿花（「キング・コットン」と呼ばれた）とその栽培のために奴隷を大勢使うプランテーションにますます依存するようになり、それにつれて、奴隷制反対の姿勢を強化しつつあった北部諸州との衝突の可能性が高まった。まだ若いこの国家は、道徳的な課題の回避と政治的な妥協によって、そうした衝突を先延ばしにした。

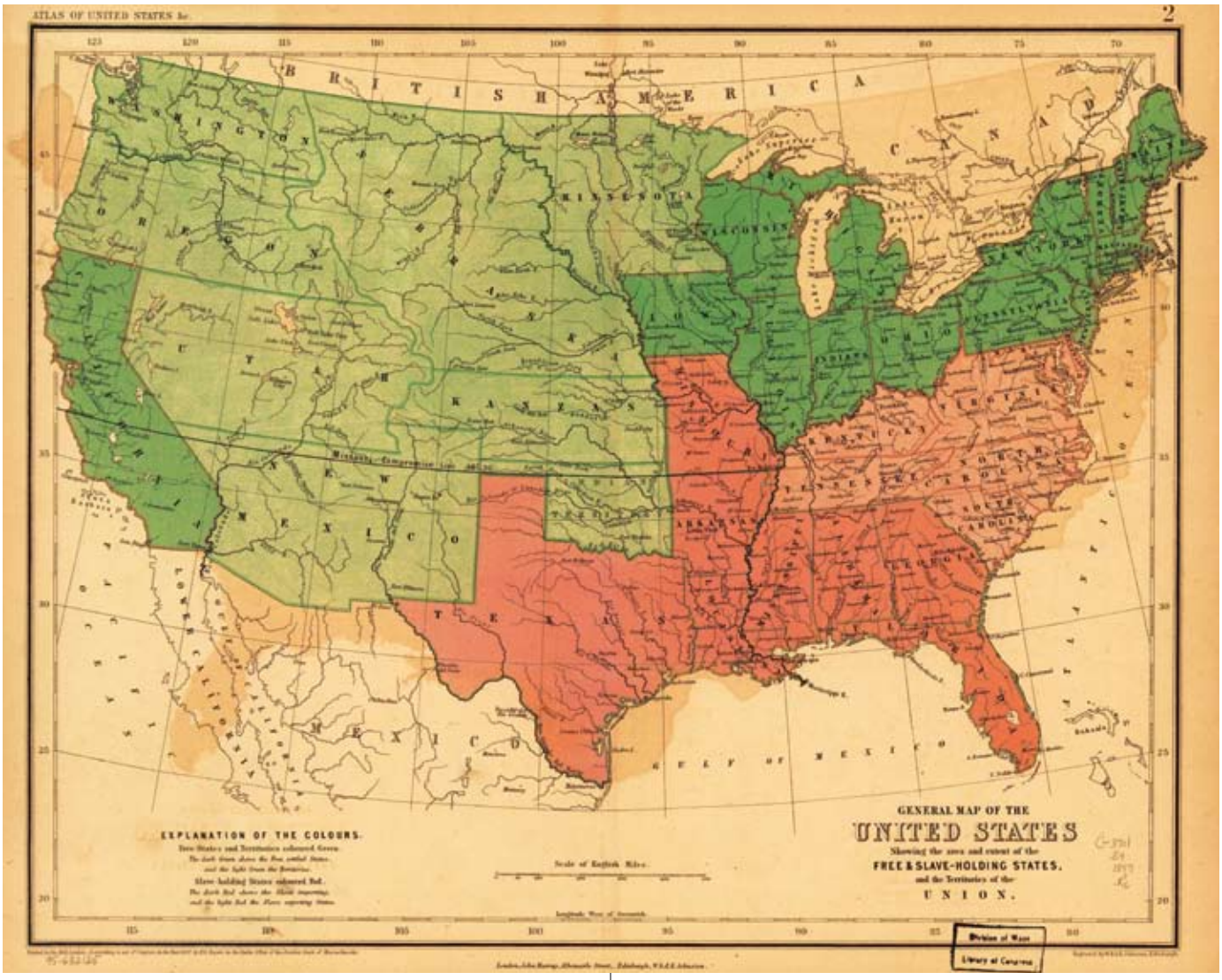
米国の独立宣言（1776年）には、普遍的な兄弟愛について述べた次のような感動的な言葉がある――「われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」

しかし、それにもかかわらず、独立宣言の主な起草者トマス・ジェファソン自身が、バージニアの奴隷所有者であった。ジェファソンはこの矛盾を認識しており、彼の草案は、奴隷制自体については述べなかったものの、奴隷貿易を「人間性に対する残酷な戦争」として強く非難していた。しかし、当時の米国の事実上の政府であった大陸会議は、独立を支持するコンセンサスを多少なりとも揺るがす可能性のある論議を避けるために、奴隷貿易に関する記述を削除した。そして、政治的な便宜が道徳的な義務を押しのけたのは、これが最後ではなかった。

1787年までには、多くの米国民が、13州から成る既存の緩やかな地方分権的な同盟から、より強力な連邦政府への移行を決意していた。同年5月から9月にかけてフィラデルフィアで開催された憲法制定会議で、そのような政府の青写真が作成された。『The Summer of 1787 - The Men Who Invented the Constitution』の著者デービッド・ステュワートによると、「この会議では奴隷制をめぐって激しい戦いがあった」 そして、「代議員の多くは奴隷制廃止の意見を持っていた」にもかかわらず「当時の米国には奴隷制廃止の風潮はなかった」

提案された憲法は、13州中9州で批准されなければ発効しなかったため、アフリカ系米国人奴隷の地位について何らかの譲歩が必要となった。ペンシルベニア州のジェームズ・ウィルソンの率いる北部の代議員は、3大奴隷州との間で合意に達した。すなわち、各州の議員数を決める際に、「非自由人」（奴隷）5人を3人として数えることになった。また20年間は連邦議会が奴隷輸入禁止法を可決することを禁止する、という合意も成立した。（議会は後に、1808年をもって奴隷貿易を廃止することを決定した。そのころには、奴隷人口が自然に増加していたため、奴隷貿易の廃止は激しい論議を呼ぶ問題ではなくなっていた。）

この「5分の3の妥協案」は、米国のファウスト的契約あるいは原罪であるとも言われている。北部の自由黒人であったデービッド・ウォーカーは、1829年に作成したパンフレッ



「自由」州を濃い緑色、奴隷州を濃い赤色と薄い赤色、そして準州（まだ州として認められていない米国の領土）を薄い緑色で表した 1857 年の米国の地図

トで次のように述べている。「ジェファソン氏は、われわれが身体的素質においても精神的素質においても白人に劣るということを世界に向けて宣言したのだろうか」 この妥協案によって、これらの州が結成する連邦はより強固になったが、同時に南部では奴隷制が確実に継続することになった。南部では、1793 年に綿繰り機が発明されたことで、奴隷労働を集約的に使ったプランテーション制度による綿花栽培が盛んになっていた。またこの妥協案は、この若い国家に極めて重大な政治的な影響を及ぼした。1800 年の大統領選挙の激しい争いでは、南部諸州が奴隷人口に対して与えられた選挙人票によって、トマス・ジェファソンが現職大統領ジョン・アダムズ（マサチューセッツ州）を破った。

さらに重要なのは、奴隷制が国家の拡張に及ぼした影響であった。議会における「奴隷」州と「自由」州の力の均衡という点で、合衆国の新しい州が奴隷制を認めるかどうかということが極めて大きな重要性を持つようになった。19 世紀前半に、議会は数々の妥協案を成立させたが、それらはおおむね、奴隷制を容認する州を連邦に加盟させるときには奴隷制を禁止する州も同時に加盟させるようにするものであった。ミズーリ協定、1850 年協定、およびカンザス・ネブラスカ法はいずれも、こうした政治的な均衡を維持したものであった。しかし、1857 年に最高裁判所が「ドレッド・スコット対サンフォード」事件で、議会はまだ州として認められていない西部の準州における奴隷制を禁止することはできないとの判決を下した。この判決は、奴隷制をめぐる地域間の対立を激化させ、最終的な衝突の時期を早めた。

この若い国家の政治システムがアフリカ系米国人に白人と同様の公民権を保証することができずにいる間にも、勇敢な男女が奴隷制廃止を目指し、米国の最も高い理想を実現するために活動を始めていた。

フレデリック・ダグラスのペンの力

米国の政治システムは米国南部から奴隷制を除去することができなかったが、南部で「われわれの独特の制度」とも呼ばれていた奴隷制に対する反対がないわけではなかった。黒人も白人も含め、強い決意を持った男女が、奴隷制廃止、す

なわち奴隷制を法的に禁止するために人生を捧げた。彼らはさまざまな戦術を使ったが、その中には暴力的なものも非暴力的なものもあった。そして、マーティン・ルーサー・キングの時代と同様に、ペンの力と人々の良心へのアピールが強力な武器となることを証明した。米国の南北戦争は奴隷解放のためだけの戦いではなかったが、奴隷制廃止論者たちは、エイブラハム・リンカーンという上院議員候補が1858年に述べた次のような意見を支持するよう、北部の多くの人々を説得した。「分裂して争う家は立っていることができない。半分が自由、半分が奴隷という状態がいつまでも続けば、この国は持ちこたえることはできない」

1835年にボストンで開かれた奴隷制反対集会には、白人と自由な黒人の両方が参加した。

アフリカ系米国人や白人の思想家による感動的な言葉によって、米国民は、南部で黒人の米国民に課されている束縛の生活と米国の気高い理想との間の矛盾と向き合わざるを得なくなった。中でも、最も強力なペンの力を発揮したのは、脱走した奴隷であり、ジャーナリスト、出版業者、そして自由の擁護者として知られるフレデリック・ダグラスであったろう。ダグラスは、1817年または1818年に奴隷の子として生まれた。彼の女主人は、メリーランド州法を無視して少年時代のダグラスに文字を読むことを教えた。彼は13歳のときに初めて本を買った。それは自由を礼賛するエッセイや詩、対話などを集めた本で、19世紀初めの米国の学校で広く使われていた。こうした少年時代の学習体験から始まって、ダグラスは、後にこの世紀有数の雄弁家となるための能力を磨いていった。1838年に、ダグラスは、農場労働者として働いていたプランテーションから脱走し、マサチューセッツ州ニューベッドフォードに逃れて、非凡な経歴を歩み始めた。

1841年に、最も有力な白人の奴隷制廃止論者であったウィリアム・ロイド・ギャリソンが、マサチューセッツ州ナンタケットで奴隷制反対の集会を開催した。地元の黒人教会でダグラスの演説を聞いていたある出席者が、ダグラスにこの集会で演説をしてほしいと依頼した。後にダグラスは、「わたしは、まっすぐ立っているのがやっとであり、つっかえたり口ごもったりせずに一言二言話すだけでも大変なことだった」と書いている。しかし、彼の言葉は聴衆を感動させた。「聴衆はすぐに共感してくれた。そして非常に静かだった聴衆が、興奮状態となった」 集会を主催したマサチューセッツ奴隷制反対協会も、それを見て、直ちにダグラスを代理人として雇った。

新しい仕事を得たダグラスは、北部各地の公開集会で演説をした。彼は奴隷制を糾弾し、アフリカ系米国人には合衆国憲法が他の米国民に与えている公民権を得る権利があると主張した。奴隷制廃止集会が人種差別主義者の暴徒の襲撃を受けることもあったが、ダグラスの味方となって奴隷制廃止を支持する白人たちもいた。ダグラスを暴徒から守ろうとした白人の仲間が殴られて歯を折られた後、ダグラスはその友人への手紙で、「わたしたち2人が兄弟同士のように、お互いのために大胆に挑戦し、行動し、死ぬことすら辞さなかったことを、わたしは決して忘れない」と書いた。そして、その仲間が「父親や友人の多くの希望に反して（中略）安楽でぜいたくでさえある生活」を捨て、代わりに「奴隷の足かせを取り除き、さげすまれる黒人の地位を向上させるために何か」をしようとする意志を賞賛した。

1845年に、ダグラスは最初の自伝を出版した。その後も数冊の自伝を出版したが、いずれも高く評価されている。ダグラスの文章は、米国の白人たちにプランテーションの生活について教え、奴隷制が黒人にとって何らかの形で「好ましい」ものであるとの考え方を捨てさせ、公正な社会であるならば決してこの慣習を容認することはできないと多くの白人に確信させた。しかし、ダグラスが急速に名声を博したことで、奴隷時代の主人に見つかって再び捕まるかもしれないという危険が差し迫った。ダグラスは、慎重を期して2年間米国を離れ、英国、スコットランド、およびアイルランドを演説して回った。ダグラスが海外にいる間に、友人たちが金を払って彼を自由の身にした。米国有数の偉大な人物の値段は700ドル余りであった。

ダグラスは英国で、政治的により積極的な奴隷制廃止運動に触れた。1847年に米国に戻った彼は、ウィリアム・ロイド・

ギャリソンと決別した。ギャリソンは、純粋に道徳的・非暴力的な行動で奴隷制に対抗する方を選び、奴隷制の「道徳的汚点」に染まらないよう北部が連邦から離脱することもよしとした。ダグラスは、そのような道は南部の黒人奴隷を助けることにはならないと指摘し、より積極的な各種の活動を支援した。また西部準州への奴隷制拡張の防止を約束する主流政党や、全国的な奴隷制の全面廃止を要求する他の政党を支持した。さらに、自宅を地下鉄道（脱走した奴隷の北部への逃亡を助けた人々のネットワーク）の「駅（拠点）」として提供し、奴隷による武装蜂起を目指した過激な奴隷制廃止論者ジョン・ブラウンの友人となった。

1847 年、ダグラスは黒人と女性の平等の権利を推進することを目的とするノーススター紙を創刊。これを皮切りに、その後も同様の新聞を数紙発行した。ノーススターのモットーは、「権利に性別はない。真実に肌の色はない。神はわたしたち全員の父であり、わたしたちはみな兄弟である」というものであった。ダグラスは、早くから熱心に男女平等のために闘った一人で、1872 年には、米国初の女性大統領候補となった平等権党のビクトリア・クラフリン・ウッドハルの副大統領候補として出馬した。

1860 年の大統領選挙では、ダグラスはエイブラハム・リンカーンの選挙運動を応援した。リンカーンの就任直後に米国北部諸州の連邦と南部諸州の南部連合との間に南北戦争が勃発すると、ダグラスは、北軍は黒人兵を採用すべきであると主張し、次のように述べた。「黒人に『Ｕ．Ｓ.』と記された真ちゅうの記章を付けさせ、ボタンにワシのデザインを付け、肩にマスケット銃を乗せ、ポケットに弾丸を入れさせれば、地球上のどのような権力も彼が市民権を獲得したことを否定することはできない」 ダグラスは、自ら兵士として戦うには年を取り過ぎていたが、黒人から成るマサチューセッツ第 54 および第 55 連隊を編成する兵士募集の任に当たった。この２連隊は、非常に勇敢に戦った。

南北戦争中、当初ダグラスとリンカーンの関係はぎくしゃくしたものであった。というのも、リンカーンはまず、北部の戦争遂行に極めて重要であった境界の奴隷州との協調を目指したためである。しかし、1862 年 9 月 22 日、リンカーンは、依然として反抗している地域で束縛されているすべての奴隷を 1863 年 1 月 1 日付で解放することを宣言した奴隷解放宣言を発表した。また 1863 年 3 月、リンカーンは黒人兵の採用を承認し、その翌年には南部が奴隷制廃止に同意する前に和平交渉を開始するという提案を真っ向から拒絶した。リンカーン大統領は、２度にわたってダグラスをホワイトハウスに招待した。後にダグラスはリンカーンについて、「会見中、わたしは自分の卑しい生まれや不人気な肌の色を思い起こさせられることはまったくなく」、大統領は「ある紳士が別の紳士に接するのを見掛けるのとまるで同じように」接してくれた、と書いた。

ダグラスの目覚ましい活躍は、南北戦争後も続いた。彼は合衆国憲法修正第 13 条、14 条、15 条の可決に尽力した。これらは南北戦争後の修正条項で、白人だけでなくすべての人々に適用される権利を明記し、個々の州がこれらの権利を否定することを禁止している。こうした修正条項が敬意をもって確実に実践されるには後の世代の勇敢な公民権運動支持者の努力が必要であったが、そのよりどころとなったのはダグラスらの築いた憲法の基盤であった。ダグラスは、その後も首都ワシントンＤＣで地方自治体の数々の公職に就き、女性の選挙権と平等を求める活動を続け、1895 年に死去した。フレデリック・ダグラスはいかなる見地からも、アフリカ系米国人として 19 世紀最大の偉人であった。

地下鉄道

フレデリック・ダグラスは非凡な才能の持主であった。ダグラスの時代には、白人にもアフリカ系米国人にも、さまざまな戦術を駆使して奴隷制と闘い、黒人の公民権を勝ち取ろうとした人たちがいた。奴隷州と自由州がそれぞれ半分を占める国においては、まず第一に、奴隷たちを北部の自由州へひそかに逃亡させるという戦術が取られるのは当然であった。いくつかの宗派の信者たちがその活動の先頭に立った。1800 年ごろから、多くのクエーカー教徒（英国で創設されペンシルベニア州で大きな影響力を持った宗派）が、脱走した奴隷をかくまい、彼らが北部で新しい生活を始めたりカナダへ逃亡したりするのを助けるようになった。1793 年および 1850 年に制定された「逃亡奴隷法」は逃亡奴隷の捕獲と送還を義務付けたが、クエーカー教徒はこの法律を不当と見なし、非暴力的に法律に違反した。その後、福音メソディスト派、長老派、および組合教会派がこの活動に参加し、さらに多くの逃亡奴隷の南部脱出を助けた。

自由を求めてカナダへ逃亡する奴隷たちを率いるハリエット･タブマン

自由になった黒人たちは、「地下鉄道」と呼ばれるこの運動で大きな役割を果たすようになった。地下鉄道と名付けられたのは、実際に地下トンネルや汽車が使われたからではなく、鉄道の用語が使われたからである。まず、地元の地理に詳しい「車掌」が、一人または複数の奴隷を「駅」（概して、協力的な「駅長」の自宅）に連れていった。逃亡奴隷は、自由な土地にたどり着くまでこうした駅を転々としていった。奴隷たちは通常、暗くなってから移動し、ひと晩におよそ16～32キロメートル移動した。これは極めて危険な活動であった。車掌も奴隷も、捕まれば厳しく処罰され、あるいは処刑された。

最も有名な車掌はハリエット・タブマンという女性であった。彼女はアフリカ系米国人の逃亡奴隷で、1849年に自由な土地に到着した後、地下鉄道の活動のためにおよそ20回南部に戻り、自分の兄弟姉妹や両親をはじめ約300人の奴隷を救出した。タブマンは変装の名人で、無害な老女や気の狂った老人などを装った。彼女が脱走させた奴隷は一人も捕まることがなかった。北部を目指すアフリカ系米国人は、聖書の「約束の地」に導かれることになぞらえてタブマンを「モーゼ」と呼び、奴隷州と自由州の境界となったオハイオ川を「ヨルダン川」に例えた。奴隷主たちはタブマンの捕獲に4万ドルの懸賞金を懸け、ジョン・ブラウンは彼女を「タブマン将軍」と呼んだ。

1850年に、地域間の政治的な妥協の結果、より強力な新しい逃亡奴隷法が可決された。それまで北部の多くの州は旧逃亡奴隷法の執行を差し控えていたのだが、この新しい法律では、特別検査官が導入され、彼らが連邦裁判所で逃亡奴隷に対する奴隷主の権利を行使する権限が認められた。またこの法律の執行を怠った連邦保安官や、逃亡奴隷を援助した者には、すべて厳罰を科した。その結果、地下鉄道はさらに積極的な戦術を使わざるを得なくなり、法廷から黒人を連れ去ったり、連邦保安官に拘束されている黒人を救出したりする大胆な行動も見られた。

地下鉄道の仲介者、駅長、車掌らの人数は相対的には少なかったが、彼らの活動によって自由になった奴隷は何万人にも上った。自らの危険を顧みない彼らの勇敢な行動は、北部における奴隷制反対の感情を高めた。南部の多くの白人はそうした反応と、1850年の逃亡奴隷法に対する北部の抵抗を見て、国の半分を奴隷州が占めるような事態を、北部が永久に容認し続けることはないと確信するに至った。

剣によって…

1663年にはすでに、バージニア州グロスター郡で黒人数人が反乱を企てたかどで斬首刑になったことに対し、黒人奴隷が奴隷主に対して何度も反乱を起こしていた。ハイチで黒人奴隷たちがフランス人入植者を追放し、奴隷農園制度を廃止して、独立共和国を設立したことは、アフリカ系米国人たちを鼓舞する出来事であった。ペンシルベニア州フィラデルフィアで黒人実業家として成功したジェームズ・フォーテンは、アフリカ系米国人も「いつまでも現在の束縛状態にいることはできない」と宣言した。米国南部の白人農場主たちは、フォーテンの言葉が正しいことを恐れ、わずかでも反乱の兆候があれば容赦なく罰した。

しかし、絶望的な戦いであっても、武器を取る決意を固めた勇敢なアフリカ系米国人もいた。おそらく最も有名な戦いは、1831年にバージニアで起こった反乱である。バージニア州サザンプトン郡にナット・ターナー（1800～1831年）という奴隷がいた。ターナーの最初の主人は、彼が読み書きと宗教を学ぶことを許した。ターナーは説教を始め、信者を集めるようになり、一部の記述によると、自分は黒人を自由に導くために神に選ばれた存在であると信じるようになった。1831年8月22日、ターナーと50～75人の奴隷がナイフ、手おの、まさかりなどで武装し、2日間にわたって家から家へと回って奴隷を片端から解放し、その過程で大勢の女性や子どもを含む白人のバージニア州民50人を殺害した。

これに対する反撃は迅速かつ圧倒的なものであった。地元の民兵が反乱者を追跡・捕獲し、48人が裁判にかけられ、うち18人が絞首刑になった。ターナーは逃亡したが、同年10月30日、洞窟（どうくつ）の中に追い詰められた。裁判にかけられ有罪となったターナーは、絞首刑に処され、その遺体は皮をはがれ、首を切られ、四つ裂きにされた。一方で、復讐（ふくしゅう）心に燃えた白人の暴徒が、ターナーの反乱とはかかわりのない黒人も含め、手当たり次第に黒人を襲撃し、およそ200人の黒人が殴打され、リンチにかけられ、あるいは殺害された。

ナット・ターナーの反乱の政治的な影響は、サザンプトン郡をはるかに越えた広域に広がった。南部各地では、それまでにも増して厳しく黒人の自由を制限する新しい法律が制定され、奴隷制反対の運動が抑圧された。一方ボストンでは、ウィリアム・ロイド・ギャリソンが、ターナーの反乱の責任は奴隷制反対運動にあるとする者を偽善者として非難した。ギャリソンは、米国の白人は事あるごとに誇らしく自由を賛美しているが、奴隷たちもまさにその自由を求めて戦っているのだと主張し、次のように述べた。

1831年にバージニアで起きた、ナット・ターナーの率いる奴隷たちの反乱

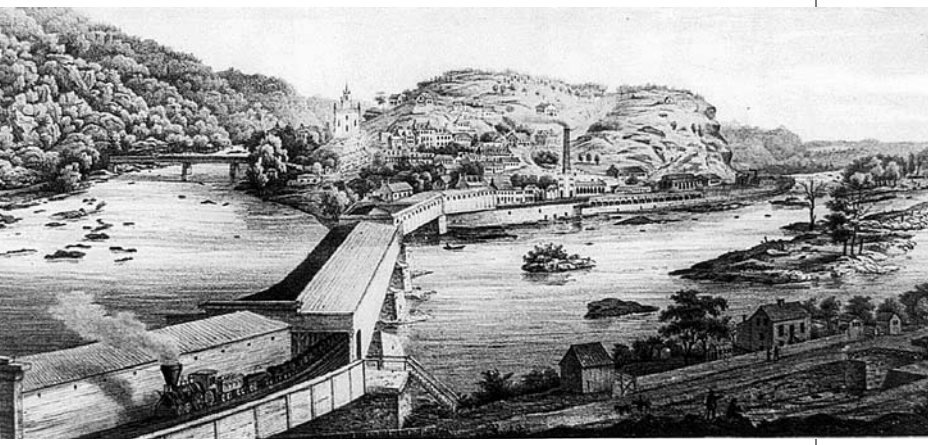
あなたがたは、奴隷解放を支持する平和的な同胞が奴隷の反乱を扇動していると非難する。そのような非難は、悪意に満ちた中傷として撤回すべきである。奴隷たちは、われわれの奨励を必要とはしない。彼らを駆り立てるのは、彼らのむち打たれやせ衰えた体、絶え間ない重労働、彼らの無知、あなたがたの父が自由を求めて戦ったすべての野原、谷、丘、そして山、あなたがたの演説、会話、式典、パンフレット、新聞、わき上がる声、海を越えて渡ってくる音声、そして彼らの上からも下からも回りからも送られてくる抵抗への勧誘である。それ以上の何が必要だろうか。そのような周囲のさまざまな力によって影響を受け、新しい傷の痛みに苦しむ彼らが、他の「英雄たち」が戦ったように、失われた権利を求めて戦うために立ち上がるのは、意外なことだろうか。それは決して意外なことではない。

反逆者ジョン・ブラウン

ジョン・ブラウン（写真は1859年ごろのもの）は、大規模な奴隷の反乱のきっかけを作ろうとしてバージニア州（現在のウェストバージニア州）ハーパーズフェリーを襲撃したが、失敗に終わった。

武力で黒人奴隷を解放しようとしたもうひとつの著名な事件は、白人の米国人を指導者とするものであった。ニューイングランド出身のジョン・ブラウンは、長年にわたって力ずくで奴隷制廃止を実現させることを検討していたが、1847年にフレデリック・ダグラスにその計画を実行する意志を打ち明けた。ブラウンは1855年に、奴隷制支持派と反対派が激しく衝突していたカンザス準州に入った。衝突の争点は、カンザスを「自由の地」として連邦に加盟させるか奴隷州として加盟させるか、という点であった。支持派と反対派がそれぞれに入植地を築いていた。

カンザスで奴隷制支持派が「自由」な土地ローレンスを襲撃した後、ブラウンは4人の息子たちと共に、1856年5月24日、奴隷制支持派の村ポタワトミーを襲撃し、男性5人を殺害した。これが「ポタワトミーの虐殺」と呼ばれる事件である。続いてブラウンは、奴隷制支持派の武装集団に対して次々とゲリラ攻撃を行った。彼はニューイングランドに戻り、黒人の戦闘集団を結成しようとしたが、その成果は思わしくなかった。しかし、主要な奴隷制廃止論者たちから資金を集めることにはある程度の成功を収めた。



ジョン・ブラウンの悪名高い襲撃の現場、バージニア州（現在のウェストバージニア州）ハーパーズフェリー

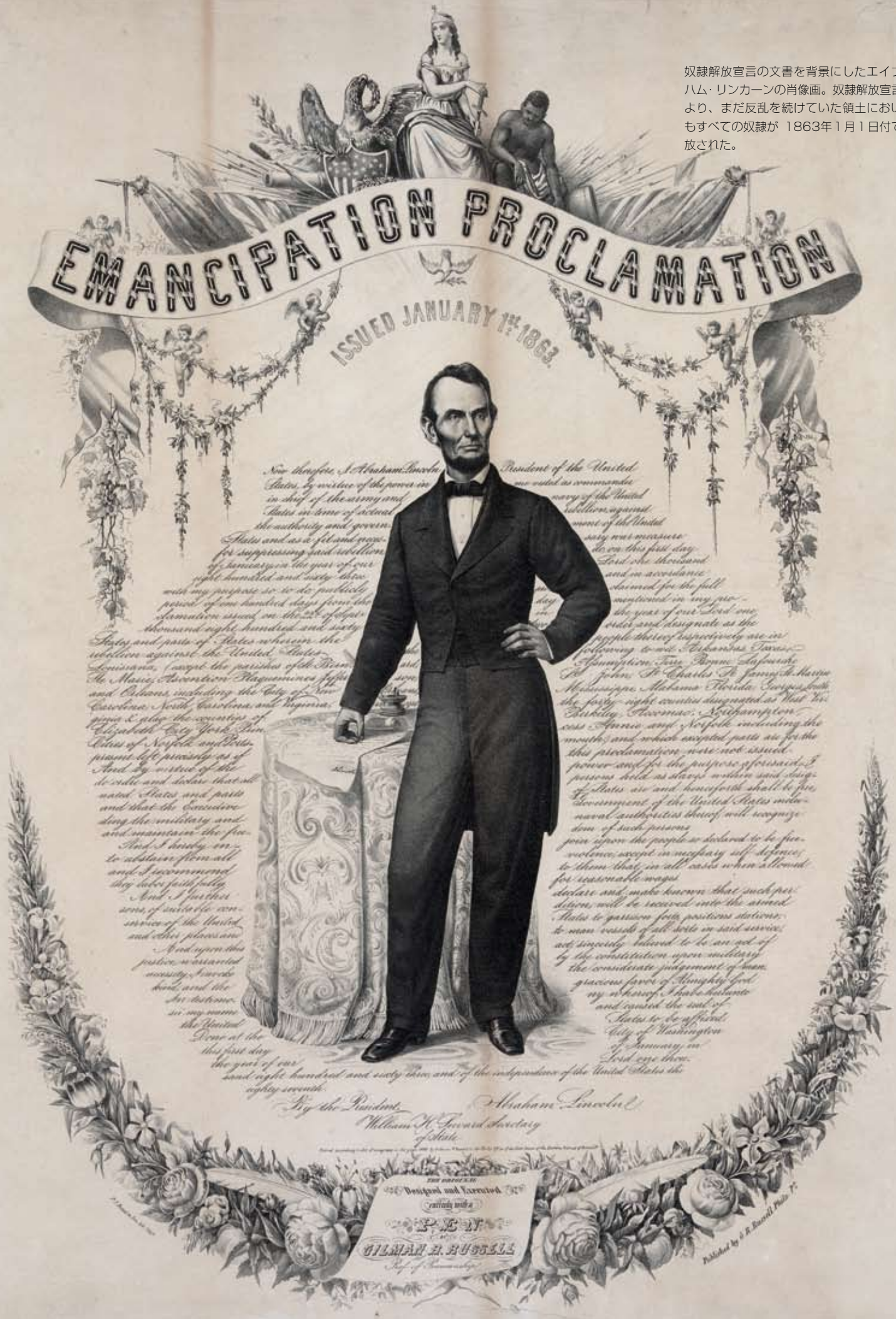
カナダでブラウンの支持者による集会が行われ、ブラウンは、南部の奴隷主たちを追放するための暫定政府の最高司令官に選ばれた。彼は、ウェストバージニア州（当時はバージニア州）ハーパーズフェリーに近いメリーランド州内の地点に秘密の基地を設置し、支持者たちが集まるのを待ったが、そのほとんどは現れなかった。1859年10月16日、ブラウンはおよそ20人の白人と黒人から成る部隊を率いて、ハーパーズフェリーの連邦武器庫を占領し、約60人の地元名士を人質に取った。彼の計画は、脱走奴隷の集団を武装させ、南へ向かって進軍しながら途中でさらに多くの奴隷を解放していくことであった。しかしブラウンはその時期を逸し、間もなくロバート・E・リー中佐の率いる米海兵隊の中隊に包囲された。（リーは後に南北戦争で南軍の司令官となる。）ブラウンは降伏を拒否した。その後の戦闘で負傷し捕獲されたブラウンは、バージニア州で裁判にかけられ、反逆、共同謀議、および殺人の罪で有罪となった。判決が下された後で、ブラウンは陪審団に向かって次のように述べた。

> わたしがこのように介入したことは、わたしが常に率直に認めてきたように、神に嫌われた貧しい人々のためにしてきたことであり、間違ったことではなく正しいことであったと信じている。今、正義の目的を推進するためにわたしが自らの生命を失うことが必要なら、また私の流す血とわたしの子どもたちの血とを混ぜ、この奴隷の国における不道徳、残酷、かつ不正な立法によって権利を無視された何百万もの人々の血と混ぜることが必要と見なされるならば、わたしはそれに従おう。だからそれを実行するがいい。

ブラウンは、1859年12月2日に絞首刑に処され、奴隷制反対運動の殉教者となった。その1年後に始まった南北戦争で北軍の兵士たちは、「ジョン・ブラウンの亡きがら」という歌を歌いながら行進した。（この歌の歌詞にはいくつかのバージョンがあり、ジュリア・ワード・ハウの作詞によるものは後に「リパブリック賛歌」として知られるようになった。）歌詞の一節は次のようなものである。

ジョン・ブラウンの亡きがらは、土の中で朽ちている
ジョン・ブラウンの鉄砲は、さびと化した血痕で赤く染まっている
ジョン・ブラウンのやりは、最後の果敢な一突きを見せた
彼の魂は行進を続けている！

奴隷解放宣言の文書を背景にしたエイブラハム・リンカーンの肖像画。奴隷解放宣言により、まだ反乱を続けていた領土においてもすべての奴隷が 1863年1月1日付で解放された。



南北戦争

米国では独立直後から1860年にエイブラハム・リンカーンが大統領に選出されるまでの間、奴隷制と米国の黒人の地位をめぐる問題が、北部と南部の関係を徐々に悪化させていった。リンカーンは、奴隷制を「醜悪な不正」と呼んでこれに反対したが、彼の主な関心事は連邦を維持することであった。従って、すでに奴隷制の存在する州ではそれを認める一方で、奴隷制が西部の準州へ拡張されることを禁止しようとしていた。しかし、南部の白人は、リンカーンの大統領選出を南部の社会秩序に対する脅威と見なした。1860年12月にサウスカロライナ州が連邦から離脱したのを皮切りに、南部11州が連邦を脱退して、アメリカ南部連合を結成した。

リンカーンをはじめ何百万もの北部人にとって連邦は、歴史家のジェームズ・M・マクファーソンが書いているように、「ひとつまたはいくつかの州の行動によって解体することのできる自主的な州の同盟ではなく、米国民すべてを結び付けるきずな」であった。リンカーン大統領は個人秘書に次のように語っている。「われわれが今すぐ答を出さなければならないのは、自由な政府においては少数派は好き勝手に政府を解体する権利を持つのかという問題だ」 こうして、リンカーンは、戦争の初期に次のように宣言した。「この戦いでわたしが最も重視している目標は連邦を救うことであり、奴隷制を守ることでも破壊することでもない。奴隷を一人も解放せずに連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。すべての奴隷を解放することによって、連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。そして、奴隷の一部を解放し、残りを奴隷のままにしておくことによって連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう」

しかし、地域間の対立を激化させる要因となったのは奴隷制であった。悲惨な戦争が長引くに従い、多くの北部人は、いかなる状況においても奴隷制を受け入れる意志をなくしていった。南部の黒人と直接接触した北軍兵士たちが、黒人の置かれた苦境に同情することも多かった。リンカーンも、奴隷を解放することによって南部連合の経済基盤を攻撃し、ひいてはその戦争遂行能力に打撃を与えることができると考えた。また解放された奴隷たちは、北軍のために武器を取り、自分の力で自由を「勝ち取る」ことができた。こうした諸々の理由が重なり、黒人奴隷の解放と連邦の維持とが、北軍の戦う目的として結び付いた。

1863年1月1日に発効したリンカーンの奴隷解放宣言は、反乱州のすべての奴隷は「(同日以降) 永遠に、自由の身となる」と宣言した。リンカーンはこの文書に署名をしながら、「わたしの生涯において、この文書に署名をすることほど、正しいことをしていると確信したことはない」と述べた。

後にアフリカ系米国人の指導者となるブッカー・T・ワシントンは、7歳のころに、住んでいたプランテーションで奴隷解放宣言が読み上げられるのを聞いた。ワシントンは、1901年に執筆した自伝『Up From Slavery』に次のように書いている

> 偉大な日が近付くにつれて、奴隷居住区ではいつもより歌声が多くなった。歌声はそれまでより大胆に響き渡り、夜遅くまで続くようになった。聞こえる労働歌の歌詞のほとんどは、何らかの意味で自由に言及するものだった。(中略) よそから来たと思われる人 (合衆国の役人だったと推測する) が短いスピーチをし、次にかなり長い文書を読み上げた。それが奴隷解放宣言だったのだと思う。それが終わった後、わたしたちはみんな自由であり、好きな時に好きな所へ行ってよいと告げられた。わたしの脇に立っていた母は、腰をかがめて子どもたちにキスをした。喜びの涙が彼女のほおを伝っていた。彼女はこれがどういうことなのかをわたしたちに説明し、この日が来ることを長い間祈っていたが、自分が生きているうちには来ないのではないかと心配していたと話してくれた。

脱退した諸州は、議会の議席を回復する条件として、合衆国憲法修正第13条、14条、および15条を批准することを義務付けられた。これらの「再建修正条項」は、奴隷制を廃止し、すべての市民に対する法による公平な保護 (州によるものも含む) を保証し、「人種、肌の色、または隷属の前歴」に基づく投票権の差別を禁止した。このように、南北戦争後、アフリカ系米国人にも他の米国民に与えられていた公民権を保証するための法的基盤が確立された。しかし、恥ずべきことにそれからさらに1世紀近くにわたって、こうした法律は、その意味するところは明白だったにもかかわらず、地域的な政治をめぐる妥協の駆け引きがアフリカ系米国人のための正義に優先することになった。

南北戦争の黒人兵士

1861年に南北戦争が始まった時、ワシントンDCに住む自由黒人だったジェーコブ・ドッドソンは、サイモン・キャメロン陸軍長官に手紙を書き、ワシントンの町を守るために志願することを望む「300人の信頼できる有色の自由人」がいることを伝えた。これに対してキャメロンは、「本省は現在、いかなる有色の兵士にも、この政府への奉仕を呼び掛ける意志はない」と返答した。植民地の民兵軍には奴隷も自由人も含め黒人が所属していたこと、また独立戦争では両陣営に黒人兵がいたという事実も役に立たなかった。多くの黒人男性は、軍隊に志願すれば自由と全面的な市民権を得られるかもしれないと考えた。

なぜ多くの軍および民間の指導者たちは黒人兵の採用を拒否したのだろうか。黒人兵には白人兵と戦う勇気がないだろうという意見があった。黒人は兵士として劣っているという意見、また白人兵が黒人兵と一緒に戦おうとはしないだろうという意見もあった。しかし、こうした意見にくみしない軍指導者も少数ながら存在した。

サウスカロライナ州のサムター要塞で南北戦争の最初の砲撃が行われてからほぼ1年後の1862年3月31日、デイビッド・ハンター将軍の率いる北軍の部隊が、フロリダ州北部、ジョージア州、およびサウスカロライナ州沿岸の諸島を占領した。島で豊かな綿花やコメのプランテーションを所有していた白人たちは、南部連合の支配する本土へ脱出した。彼らの奴隷たちの大半は島々に残り、間もなく本土からも脱走奴隷が島に渡ってきた。彼らは、北軍の前線にたどり着きさえすれば自由になれると考えた。しかし、話はそう簡単ではなかった。

ハンターは、この地域に多い感潮河川や島々で南部連合のしぶといゲリラ的な抵抗勢力と戦うために、さらに多くの兵力を必要とした。本土から脱走してくる奴隷によって島々の黒人人口が膨れ上がるのを見たハンターは、アフリカ系米国人の存在が軍の人員不足を解決できるのではないかと考え、極めて急進的な計画を立てた。

強硬な奴隷制廃止論者だったハンターは、自らの責任で、これらの島々だけでなく南部連合の支配するサウスカロライナ、ジョージア、およびフロリダの各州においても奴隷を解放し、武器を持つ能力のある黒人男性を北軍兵士として採用した。そして、南北戦争で初めての黒人だけから成る連隊を結成し訓練しようとした。

当時、情報伝達には時間がかかり、エイブラハム・リンカーン大統領がハンターの黒人連隊のニュースを耳にしたのは6月になってからであった。リンカーンは奴隷制には反対していたが、厳しい戦況下の北部、特に北部に味方した境界の奴隷州における世論より速いペースで物事を進めることを恐れた。また断固として、「いかなる司令官も、わたしが責任を負うべきそのようなことを、わたしに相談することなくしてはならない」と主張した。大統領はハンター将軍に怒りに満ちた手紙を送り、将軍にも、また大統領のいかなる部下にも、何者をも解放する権利はないと伝えたが、一方で、大統領自身が自ら選んだ時期に奴隷を

「黒人に『U．S．』と記された真ちゅうの記章を付けさせ、（中略）肩にマスケット銃を乗せ、ポケットに弾丸を入れさせれば、地球上のどのような権力も彼が市民権を獲得したことを否定することはできない」――フレデリック・ダグラス

奴隷解放宣言とともに、北軍は積極的にアフリカ系米国人兵士を採用し始めた。

解放する権利を主張することも忘れなかった。ハンターは黒人連隊を解散するよう命じられたが、彼のまいた種は間もなく芽を出した。

ハンターが黒人連隊を解散させてから2週間後の1862年8月、陸軍省は、ルーファス・サクストン将軍に、北軍初の黒人連隊、サウスカロライナ第1義勇連隊の結成を許可した。このほかにも黒人連隊が沿岸地帯で結成され、戦争が終わるまで沿岸の島々の防衛に成功した。

同じころ、カンザス第1黒人義勇連隊も結成されたが、これは正式に陸軍省の承認を得たものではなかった。一方リンカーン大統領は、奴隷解放宣言とアフリカ系米国人兵士の採用の基盤を慎重に築いていた。そして北部の白人が、南部連合の経済と戦争遂行における黒人奴隷の極めて重要な役割を理解するようになるに従い、奴隷解放を軍事的必要性として正当化することができた。

1863年1月1日にエイブラハム・リンカーンが奴隷解放宣言に署名すると、奴隷に対する軍の方針がさらに明確になった。北軍の前線に到達した奴隷は自由となった。また陸軍省は、北軍の新たな連隊として合衆国黒人部隊(USCT)を結成し、黒人兵の募集と採用を始めた。しかし、これらの連隊の将校はすべて白人であった。

1864年秋までには、多くの北部諸州および北軍が占領した南部の州で、およそ140の黒人連隊が結成されていた。南北戦争中、約18万人のアフリカ系米国人が従軍し、うち7万5000人以上が北部の黒人志願兵であった。

黒人連隊と白人連隊は隔離されていたが、戦場は同じであった。黒人兵は、敵である南部連合と戦うと同時に、味方である北軍兵の一部からの疑惑とも戦わなければならなかったが、勇敢に戦って勝利を収めた。

黒人は軍隊に受け入れられたものの、その役目は守備隊あるいは雑役に限られることが多かった。有名なマサチューセッツ第54歩兵連隊のロバート・グールド・ショー大佐は、部下の黒人たちの兵隊としての能力を証明するため、戦闘に参加させてほしいと上官に積極的に働きかけた。そのほかにも、部下の実力を理解し、同様の努力をした将校たちがいた。黒人兵は、白人兵と同じ給料をもらうために闘わなければならなかった。白人より低い給料を拒絶した連隊もあった。議会が黒人兵にも平等な給料を支払うことを定めた法律を可決したのは、南北戦争の終わった1865年のことであった。

こうした制約があったにもかかわらず、合衆国黒人部隊は合計449回の戦闘に参加し、うち39回は大規模な戦闘であった。彼らは、サウスカロライナ、ルイジアナ、フロリダ、バージニア、テネシー、アラバマ、その他の各地で戦い、もし捕虜となれば戦争捕虜としての権利を与えられず奴隷として売られることが分かっていたが、それでも勇敢に砦を襲撃し、砲撃に立ち向かった。黒人兵は、兵士としてのすべての義務を、名誉をもって、勇敢に遂行した。

将校は白人に限るというのが陸軍の方針であったが、最終的には約100人の黒人兵が将校に昇進した。また黒人の軍医8人が黒人部隊に配属された。そして、黒人部隊の兵士十数人が、その勇敢な働きによって名誉勲章を受章した。

1948年に、ハリー・S・トルーマン大統領が、軍隊の人種差別廃止を命令した。現在も、軍隊は米国の黒人にとって社会的・経済的機会を創出する推進力となっている。しかし、米国の軍隊でアフリカ系米国人が完全に受け入れられるための道を切り開いたのは、南北戦争時代の黒人兵が払った犠牲であった。さらに根本的な点として、彼らの努力は自由と尊厳を求めるアフリカ系米国人の闘いの重要な要素であった。

ジョイス・ハンセン
ジョイス・ハンセンは、コレッタ・スコット・キング名誉図書賞を4回にわたって受賞。『Between Two Fires - Black Soldiers in the Civil War』をはじめ、若い読者のための現代・歴史小説およびノンフィクションの著書15冊のほか数々の短編小説を出版している。